
研究動向・近況報告

金 基 淑（研究科長）

ここ数年、韓国の文化資源と観光の調査に取り組んでおり、2018年の夏にも韓国の地方都市の伝統家屋について調査を行った。集合住宅で生活する多くの人々にとって地方の伝統家屋での滞在はそれ自体が貴重な伝統・観光体験となっているのである。もうしばらくこうした調査を続け、発表できればと思っている。

2018年11月に文化人類学研究科では久々に大きなイベントを開催した。「文化人類学研究科18年間を振り返る」というタイトルのもとで、修了生たちをパネリストに迎え、シンポジウムを開いた。社会人として苦勞しながらもそれぞれの立場や位置で頑張っている修了生たちの話に胸が熱くなった。このシンポジウムの模様は、来年度の研究科紀要に掲載する予定なので、ぜひ読んでいただければと思う。

鵜飼 正樹

以前に書きました、少女歌劇団の研究、そこそこ進んでいます。ひとつ発見があると、ふたつ謎が生まれる、といったふうで、久しぶりにワクワク、ドキドキしながら研究を進めています。今年の3月には宮崎で、8月には大和郡山で、資料展を開催することになりました。なるべく早く、みなさんにも成果をお見せしたいと思っています。

杉本 星子

昨年に引き続き、向島ニュータウンまちづくり推進会議の活動に忙殺されています。学生たちと始めた向島学生センターの留学生を対象にした日本語クラスは、いい感じで軌道に乗り始めています。来年度は向島地域の学校統合で小中一貫校ができ、中学校跡地が地域コミュニティーセンターのような活動場所になります。そこで子どもたちといろいろなことができそうなので、ちょっとワクワクしています。また、24号線沿いにニトリの大型店舗もできます。向島は少しずつ変わっています。若い世代が住んでもよくなって思える街になったらな、と思います。卒業生、戻って来ませんか。団地に住んで農業できるよ。

さて、研究の方も、マダガスカルの家蚕・野蚕の調査を続けています。昆虫学者と一緒にアゲマ・ミトウレイという野蚕の本を出しました。超マニアックなので売れそうもないです。昨年9月には、村の人たちと一緒にマダガスカルの希少な野蚕種の養蚕化プロジェクトを始めました。巨大なケージをつくって繭を羽化させるところまではいきました。次は卵が孵化するか。ますます人類学者を逸脱しつつあります。

西陣の調査も続けてはいますが、染織産業の現場はほんとうに末期的な状況です。せめて記録をとっておかなくてはと思うのですが、なかなか時間がとれず原稿もまとめられな

いうちに、お話を伺った職人さんたちが高齢化でどんどんやめていかれます。どんなによいものを作っても、社会がその価値を評価できなくなっているのです。仕方がないです。本学の大学院も同じですね。大学院が終わるのは寂しいですが、これも一つの時代の流れだとしみじみ思う、今日この頃です。

馬場 雄司

今年度は、文化人類学研究科最後の年です。その最後の年の専任教員として1年間お手伝いさせていただきました。それまで、福祉関連の修論のアドヴァイスなどにたずさわり、一昨年度より非常勤として授業も担当させていただきましたが、審査を頼まれた最後の修士論文を目の前にして、専任教員としての重みをひしひしと感じています。

私は、タイをフィールドとして、1990年からナーン県の1農村を中心として調査研究を続けてきました。電話の1つもなかった村が30年近くの間には機織りのおばさんがスマホでフェイスブックに興じるようになる、そうした変化におののきつつ定点観測を続けています。その成果の一つとして、昨年は、「農村のポピュラー文化—グローバル化と伝統文化保存・復興運動のはざま—」（福岡まどか・福岡正太編『東南アジアのポピュラーカルチャー—アイデンティティ・国家・グローバル化—』スタイルノート）が公刊され、今年2月には、「都市と農村のはざまでゆれるケアの社会基盤としてのコミュニティの行方—ナーン県タイ・ルー村落の事例」（速水洋子編『東南アジアにおけるケアの潜在力—一生のつながりの実践—』京大出版会）が公刊されます。

タイでの研究は、この農村の一僧侶の社会活動支援も含めて今後も続きますが、これまで実践・研究ともに関わってきた音楽・芸能の社会における意味を考えることによりシフトするつもりです。宇治のフォークソングでの高齢者の生きがいづくり、京都のワールドミュージックでのまちづくり、医療・福祉分野での民族楽器の可能性などこれまでも様々な試行錯誤を続けてきました。文化人類学研究科は、ここで幕を閉じますが、研究・教育の場は大学だけではないとも感じています。今後、研究は続けていきますが、より音楽の意味を考えるべく、そうした位置に自分をおけるようにしていこうと考えています。